

毎年誕生日 アジアの社

を祝ってくれる 員たちの高い士気と絆

伊藤 澄夫 伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

当社のフィリピンの事業所が稼働を開始したのは1997年だった。5年後の2002年には社員が育ち、安定した利益が出る状況となった。そのため税制のメリツトが大きい輸出加工区に移転することが決まった。

ところが新工場の建設が始まったその時期、駐在していた加藤社長が急逝した。5年間の駐在で、たった一人ですべての業務をこなしていた同氏をなくしたことで、常識的には同社の存続は不可能。合併相手の中国系フィリピン人も存続が不可能と判断し、当社に株の返還を求めたため、当社の独資となった。

そして大黒柱を失ったため、日本本社から4人を派遣し、事業の継続をすることに舵を切った。

この時期、フィリピン人社員の雰囲気は極端に向上したのだが、それは日本人が好きな彼らにとって、中国系の経営者がいなくなるのが理由だったらしい。日系独資になってからの彼らの勤務態度は極めて明るく、忠誠心を持って勤務してくれている。

団体賞として商品券を用意。優勝した組の喜びようは表現できないほどであるが、彼らのチームワークの良さが職場での効果的な作業態度につながっている。こんなことも私がフィリピン人を評価している理由の一つだ。

彼らにとって、クリスマスの次にうれしい行事が誕生会だ。当地の誕生会では、費用はすべて祝ってもらう側が支払うことになっている。そのため、その習慣を知らずに初めて駐在した者は面食らっている。

単独資本になってから私のマニラ出張は年間8、9回に増えたが、そんな彼らは、6月の出張時には必ず私の誕生会を開いてくれる。そして数年前からは誕生日当日の6月4日に出張依頼が来るようになり、業務より私の誕生会が優先されるようになった。

「クリスマスならともかく、私の誕生日ごときのダンス披露はしなくていいよ」と伝えたが、毎年踊ってくれている。私はもうすぐ80歳に手が届く年となったので、決して誕生日が嬉しいとは思って

そうして新工場に移転して以降、私は16年間、毎年5、6人の本社社員を引き連れ、クリスマスパーティーに参加している。フィリピンでは国民の90%がキリスト教徒で、そのうち大半はカトリック系。彼らにとって1年のうちで最もうれしい行事がクリスマスだ。読者もご存じのように、日本で就労している多くのフィリピン人もこの日だけは帰国している。

私は家族的で信頼し合える社員との絆をさらに深めようと、クリスマス会の目玉として豪華なプレゼントをすることにした。同時に恒例の臨時ボーナス支給の内示を発表すると、窓ガラスが割れるのではないかと思うほどの拍手で盛り上がった。

フィリピンでは、13番目の給与と言われているが、クリスマスの前1ヵ月分の給与支給が国で定められているのだ。当社はさらに利益の10%を支給するようにしているの、このように盛り上がるの、だろう。

新規の受注が増加するたびに、その部署に社員を採用するのが

いない。しかし誕生日に訪比することでフィリピン事業所の全社員が喜び、誕生会の支度をするのも「楽しくて仕方がない」と言ってくれており、健康が続く限り毎年6月には訪比するつもりである。

昨年春以降、新型コロナウイルスで国際線が長期にキャンセルされ、一年以上渡航できない状態が続いているが、昨年6月、彼らはがっかりしつつも「ハッピーバースデー・イトウサン」と合唱したビデオを送ってくれた。

5年前にはインドネシア事業所からも誕生会に招かれた。フィリピン事業所から駐在にきている技術者から「フィリピンでは毎年イトウサンの誕生会をしている」と聞いたインドネシアの社員らが、「負けずにわれわれもイトウサンに来てもらおう」となったのだ。プ口の伝統舞踊の講師を呼び1週間学んだという女性社員は民族衣装を着け、専門家と思えるような見事な踊りを披露してくれた。

遊びであれ仕事であれ、両国の社員が互いに意識して競うことは、長期的に見て事業のほうにも良い

フィリピンのやり方だ。私が「他の部署で減産になっているので、そこから配置転換しなさい」と何度も伝えたが、人事はそれに応じなかった。しかし決算賞与が出るようになり、人員がむやみに増加すれば一人当たりの賞与額が減ることが分かったため、なるべく少ない社員で作業をするよう心掛けるようになった。

日本から会社見学に来ていただく皆さんからは、「アジアの工場にしては社員数が少ないね」とよく言われるが、その理由は決算賞与にある。これによって長年社員に教育をしている「一人あたりの付加価値向上」を理解させることができたのだ。

ちなみにクリスマスパーティーのメイン・イベントとして職場単位の5、6組のチームを編成しダンスを披露するが、2ヵ月前から業務終了後に練習しているらしい。揃いの衣装は日本円で800円程度の生地を買って皆で仕立てるが、これも彼らの楽しみだ。

日本から合流した社員が審査員になって順位を決めることになり、

影響を与え、毎年進化していくのではないかと楽しみだ。

今年、新型コロナウイルスが終息することを願い、6月にはなんとでも参加したいと思っている。私は長年社員を大切にしている経営者として、向こうから仕掛けてくれるので、これほどうれしいことはない。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。
(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名譽教授、神戸大学非常勤講師を務めて後進の育成に寄与。
2017年4月春の叙勲「旭日単光章」受章。
著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。